

道祖神 しんぶん 第二号

2021年12月7日
発行：道祖神芸術調査グループ
山梨アートプロジェクト2021
深澤孝史
「道祖神リプレゼンテーション」
ご意見・ご感想は
dousojin2021@gmail.com
までお送りください。

●○わたしと道祖神○●

とある丸石との出会いを「MY丸石」と書いたけれど、実はコモンズ、つまり世界の、宇宙の丸石といえる。《道祖神リプレゼンテーション》展示期間（二〇二一年一月一六日～二月十二日）には、県立美術館の北池に出張中で、誰でも出会い触れることができる。北池が東日本大震災の被災によって水を失いはや一〇年。噴水でもあった石彫刻（流政之作品）には頂上に一つ、周辺にいくつもの丸石が、既存の石に寄り添うように展示されている。その中の、一番上の大きい丸石がこのコはす：！（早く会いに行きたい）。※写真参照

「MY丸石」の由来を探るべく、持ち主の神澤宅に電話、まず奥様にお話をうかがった。（造園業者ではなく）二〇年以上前、今の庭を作る前に、御岳・昇仙峡周辺の清川部落から、近隣に山を持つ親戚の方が運んだ石の一つでは、と（翌日）主人からは、「荒川に向かって北側から川上に向かうと東にある吉沢（きささわ）の山」と聞く。山に沢山の石があったとか。奥様が何気に言われた「山と川は同じもの」は、まさに名言！「あの石はあの場所に一〇年はあるはず。邪魔っけだなと思いつつ、踏んではいけない、変に扱ってはいけない」とそのままにしていた、と奥様。

ご主人によれば、あの石は、四〇〇坪ある土地（桑畑だった）に山のように積まれていた中の一つで、三〇年前にはあったとのこと。造園業者や親戚からの石が混在し、MY丸石がどこから来たかは不明という。「石の山を片付けて庭を作ったら、あの丸石が残った！ああいう石に興味があるので、始末できなくて。風呂場の扉止めに使ったけど、何かに使われていたんじゃないもったいない」とずっと動かしてはいないという。MY丸石が縁で、神澤夫妻からお話をうかがい、丸石への思いを実感した（北池を見に来てくださいという！）。

MY丸石は、関東山地を源流とする荒川の流れて揉まれ、川原で親戚の方に発見されたものだろうか？由来はわからずじまいだったけれど、展示中は北池に、その後は神澤家に戻って、以前と同じようにさりげなくご家族を見守っていくだろう。

最後に。丸石のことを思っていると、地球が一つの「丸石」に見えてきた！（私たち人間や動植物、環境は地球という丸石の表面に繁殖する苔のようなものではと）。

「丸石問答：その2」 四方幸子（特別調査員）

数年前に甲府へ引っ越してきたころ、近所を散歩して空き地の片隅にたまご型のキュートな石を見つけた。古くて大きな木の下にあって、台座のようなものにちょこんとのっかっている。おじぎをするようにごくわずかに傾いているのがいい。丸石の存在は知っていたが実物を見たのは初めてだったので、とても素朴な佇まいに「これが丸石なんだろうか」という感じだった。よく観察してみれば、木の根元の傾斜にあわせて石が積み上げられて、丸石が転がり落ちないように工夫されており、誰かが大事に祀った様子だ。

その後、峡東の道祖神場を訪れる機会があり、一口に丸石といっても色々なかたち・大きさ・質感があることや、祀りかたも個性豊かださまであることを知って丸石に惹かれるようになった。山梨のあちこちを巡るなかでふいに丸石と遭遇したときには嬉しい、いいかたちの丸石にふれた日は何だか充実している。

近所の空き地は今では駐車場として使われるようになったが、丸石はひっそりとそのままそこにある。一体いつごろからあるものなのだろう。幹線道路沿いなので、新しい建物でもできたら、あっさりとなくなってしまいうそで、石の姿を目にするたびに何となくほっとした気持ちになる。

わたしは県外の出身なので、長いつきあいのある「この丸石」というものがあるわけではない。そんなこともあって、いま甲府につくっている自分の店の敷地に、集めた丸石をいくつかおいて日々ふとした瞬間に眺めている。いまはまだ「丸石っぽい丸石」というくらい風合いが、もし何かの偶然でこれらがずっと未来まで残っていたらいつからあったのか分からない「丸石」として誰かの目にとまることがあるだろうか。



「丸石のある日々」 戸田圭亮

①芸能発表「いしはおどる いしとまう」（申込不要）
丸石神や道祖神の芸能調査を始めたダンサー・鈴木つなによる踊りの上演を行います。踊りでは、石を叩いて鳴らす場面もあり、来館者も一緒に参加できます。希望者は、事前ワークショップに参加ください。

日時：12月12日（日）13:00~14:00
13:00~13:30 事前ワークショップ（石と遊んだり、石のようになってみたり、石を感じる30分）
13:30~14:00 芸能発表
場所：「いしのまつりば」（山梨県立美術館・北池）
出演：鈴木つな／演奏：白砂勝敏、ホンナミキヨシ／
衣装：近藤朋希
※小雨決行、雨天中止（中止の場合は当日10:00までに山梨県立美術館 Twitterでお知らせします。）

【申し込み方法】

①芸能発表 | 申し込み不要、直接現地にお越しください。
②映像上映、③オンラインレクチャー | dousojin2021@gmail.com 宛に「お名前、参加方法（工房か Zoom オンライン）、参加人数（工房の場合）」を明記の上、メールをお送りください。Zoom 参加者には後日、参加用のリンクをメールでお知らせします。

【問い合わせ先】メール：dousojin2021@gmail.com 電話：090-4236-4196（深澤）

②映像上映「道祖神芸術調査グループドキュメント」（要申込）
道祖神芸術調査グループのフィールドワークやレクチャー、ミーティングなどのプロセスをまとめたドキュメント映像を上映します。

日時：12月12日（日）14:15~14:45
場所：山梨県立美術館・工房&Zoom オンライン
定員：工房30名、Zoom100名

③オンラインレクチャー「丸石神の人類学」（要申込）
日時：12月12日（日）15:00-16:30
場所：山梨県立美術館・工房&Zoom オンライン
講師：中沢新一（思想家・人類学者）（Zoom オンラインでの参加）
定員：工房30名、Zoom100名

緊急告知
12月12日（日）
クロージングイベント

●○○わたしと道祖神●○○

道祖神小説 石の満月(中)

黒田康之

私自身は石との関わりは薄いと思っている。学生時代の通学路に石が集まった場所があったかも、そんなうる覚え程度でその場所に行ってみるとそこには丸石道祖神があった、そのくらいのものだ。

私が今回道祖神芸術調査グループに入った動機は山梨における文化芸術への興味関心からだったが、道祖神などの石への思いを持つ他のグループメンバーと話をしていくと、石との関わりを薄さを心身に実感した。そして、その薄さは私と家族との距離にも関係する気がした。

先日父と私は清水港へ行った。2人きりで県外へ出るのには本当に久しぶりのことだった。その帰り車の中で、道祖神芸術調査グループの話をした。グループの目的について丸石道祖神などの石という存在が芸術表現や日常生活に与える影響を探ることだと話したが、父には山梨の道祖神を探す集まりとして捉えてしまったようだった。

父の提案で道の駅「なんぶ」からは旧道に行くことにした。自宅がある甲斐市まで石を探す二人旅、道の脇にそれらしい石を見つけると父と私は車から降りて確認した。

見つけた道祖神は、男女二人が寄り添う双体道祖神(身延町市ノ瀬)、道祖神という文字が彫られた道祖神(市川三郷町高田、中央市布施)、丸い石が置かれただけの丸石道祖神(甲斐市島上条と牛匂)。

自宅近くにも丸石道祖神があると父に言い、旅の最後にその場所に行ってみることにした。そこには大きくどっしりとした丸石道祖神が石垣の台座の上に祀られていた。石の四方には竹で境界が張られ、丸石の前には御供え用の小皿が二つ置かれていた。そしてこの丸石道祖神の事実には驚愕した。父はこの丸石道祖神を掃除する役目を担う人であったのだ。

父はこの地域に住み始めてから何十年もの間、道祖神を掃除しているという。丸石道祖神はいつからそこにあるかわからないことがほとんどだというが、父にもわからなかった。時代も分からなければその役割もすでに曖昧となった道祖神という存在を掃除し守る、その事実とそして父の気持ちがどんなものが私には分からなかった。一緒に掃除してみたら分かるだろうか。石の関係に私は少し興味を持った。そして私と石の関係がほん少し濃くなった気がした。

「道祖神シューズ」 近藤朋希

私は今回のアートプロジェクトの中でもフィールドワークの時に伺った敷島書房さんのお話が印象に残りました。特に印象的だったお話が、配達をされていて道祖神(丸石神)を見た際に「懐かしい」、「子供の頃を思い出す」というようなお話でした。

そのお話を受けて私が感じた道祖神(丸石神)の持つイメージは「人の思い出が詰まっており日常の中でひっそりと私たちを見守ってくださる神様」と考えました。そこで道祖神を持つそのようなイメージを、私が取り組んでいるファッションに当て嵌めて考えてみることにしました。

私にとっての道祖神は「思い出・日常」という見方があり、この意味合いはシューズでも同じことが言えるのではないかと考えました。なぜなら「靴」には人の思い出を内包し、足元を守ってくれるモノであると同時に人々の日常を映し出す鏡のようなモノだと思えるからです。

例えば革靴でも日々履いているうちに自分の足に馴染んできて、その中にはその人の思い出や日常を内包した「シワ」が出てきます。そのシワを手入れして綺麗にしようとした時に「あの時にはこんなことがあったよな」とか「懐かしいな」といった具合に過去を振り返り、自分について考えさせてくれる時間を与えてくれます。まさにこういった事が「人の思い出を内包し、いつも私たちを見守ってください道祖神」となることから、ファッションである靴と道祖神には何か似たような性質があると考えられました。

私は「道祖神(丸石神)×ファッション」を考え、今後のクリエイティブ活動において「いつでも過去を振り返られる靴、履いている人の日常を見守ってくれるような靴」という道祖神シューズを作ってみたいと思いました。私は今後、デザイナーが一人歩きせず、履いてくれる人と一緒に新たな付加価値を創造できる作品を作りたいと今回のプロジェクトを通して思いました。この道祖神から得たものを今後のクリエイティブ活動に活かしたいと思います。

「父と石と私」 辻佑介

「それじゃあ、お前の車で行った意味ないじゃないか」と直文は言った。「酔い覚ました」と昌彦は直文の肩を押した。この辺りはまだ町場に比べて街灯は少ない。空には満月にはもう少し日がある丸い月があった。そのせいでか、いつもよりは足元がわかるように二人は感じた。

この辺りは、住宅といつても旧家が数多く、一軒が広い。直文たちが一軒目の家を過ぎるころ、奥さんの姿はなかった。「酔って歩くのだるいな」

そう言ったのは昌彦だった。そういえばこの道は自分が子どもの時分はまだ土の道で、学校へ行く頃合いに舗装されたことを直文は思い出した。この辺の道が舗装され始めると遠くからコールトールの臭いがしたんだと直文は思った。

「なんで、お前は返ってこなかったんだ」昌彦は直文を側溝の方へ押しやるように体をぶつけてそう聞いた。

「んん」と少し考えるそぶりをして直文は続けた。「大学行ったら結構勉強とか忙しくて、バイトもしていたし、就職したらまだバブルの終わりだったから、死ぬほど仕事あったし、結婚して家のことも、子どものこともできたら、東京の方が暮らしやすかったんだ」

真面目な答えだった。そう直文は思った。でも、その大学に行くために、中学までやってきたサッカーをやめて、高校では文化部の幽霊部員で、ひたすらに受験勉強をしたのは、この町を出なくちゃいけないという言い知れない感情に突き動かされた使命感だった。農家を継ぎたくないとか、父親との食い違いとか、そういうものは後から着せた服でしかない。決して東京に憧れていたわけではない、ただ自分が大人になるということは、この町を手放すことだという確信だけがあった。そう思い返した。

「お前こそ、大学行くかと思ったら、就職組だったもん」思い返した最後に、直文はそう昌彦に言った。

た。

「結局、畑やらんとならんし、ほら、まだあの頃は兼業農家なら、会社勤めより公務員のが都合よかっただろう。坊さん先生とか結構いたし」

昌彦はケタケタと笑った。

「お前は、警察官とかになるのかと思ってたよ」「なんで」

「ずっと剣道やってたし」

直文はいつもスポーツ刈りだった昌彦の猿のような顔を思い出した。自分はそれなりに老けたけれど、髪型は昔のままだし、太っても痩せてもいないが、俊敏な猿のようだった昌彦はずいぶんおじさん臭くなったなと思った。白髪混じりの伸びた横分けもそう思わせたのかもしれない。

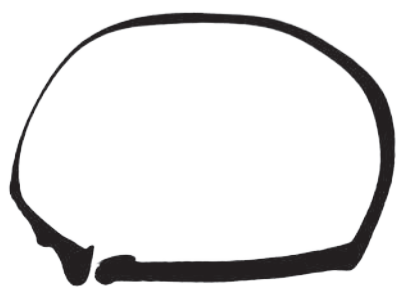
道は東西の道にぶつかった。丁字路のように見えるがここは食い違った十字路になっていた。かどにある電柱にはやっぱりLEDの街灯が白く灯っていた。電柱の立つその場所は畑が広く扱られたようになっていて、低い石組に大きな丸い饅頭のような石と、それよりはやや小さい丸い卵型や繭型の石がいくつか置かれていた。

道を曲がったところにあった小石を、昌彦はその広場に蹴り込もうとした。しかし酔っているせい、空振りをしたり、狙いが定まらなかつたりとなかなか道と広場の境界を越えない。直文はその石を軽くコロコロと転がして、その広場に蹴り込んだ。

石を奪われた昌彦は「おお」と体勢を崩して、そのまま直文に体を預けた。二人はバタバタとその小さな広場に入り込んだ。

直文はここはまだこうして道祖神が祀(まつ)られていくのは知っていたが、夜にこうしてまじまじと見るのはずいぶんと久しぶりなように感じた。

子どもの時分は、正月が明けると竹やら木やらでこの道祖神の上に小屋掛けをした。それに山から持ってきた杉や檜葉(ひば)を乗せて覆い、この辺で言う「オコヤ」を作った。それができる頃合いに、地域の子どもクラブ



で家々をまわって賽銭(さいせん)を集めて、小正月には獅子舞とどんど焼きが行われていた。それは春の神社のお祭りや並んで地域の子どもイベントだった。獅子舞が口上を述べ道祖神の世話をしている大人が祭文(さいもん)や祝詞(のりと)のようなものをあげると、オコヤを崩して各家から集めた正月飾りと一緒に燃やすのが、この地域のどんど焼きだった。その燃える火で桃の枝に刺した米粉の団子を焼いて家に持ち帰って食うのが習わしだった。火の掛かる前、オコヤの中では遊んだし、いろいろなものを見たけれど、何をしていたかは言えないしきたりだった。米粉を蒸して搗(つ)いただけの団子を焼いて、直文は砂糖をつけ、父親は醤油をつけてそれを食べた。

「まだ、獅子舞とかあるのか」

「ああ、獅子舞もどんど焼きもあるぞ。お前も来年は手伝え。来る人は減ったけどな」

昌彦は答えた。

「そう言えば、全国でも珍しいらしいぞ。こんな丸い石の道祖神。この間もどこだかの学生さんが来て、写真撮ってたわ。その子の地域だと金山神社の裏の石みたいなのが道祖神なんだってさ」

昌彦はまたニタニタと笑った。それはニョキリと直立した大石だった。

「懐かしいな」

「ああ」

昌彦の酔いはだいぶと深いようだった。ふらふらと道祖神場を出ようとすると直文の手をつかんで引き戻した。そして直文の首にすがりついて、直文にはっきりと言った。

「なあ、キスしていいか」(続く)